東京都心部における神社建築の空間特性と利用に関する研究
―旧東京市日本橋地区を事例として―

A Study on Shrine Architecture of Space Property and Utility in the downtown area in Tokyo
-A case study of Nihonbashi area in Old Tokyo city-

06UM3124　宮城 朝亮
Tomokatsu MIYAGI

指導教員　山崎 文雄
審査協力者　宇野 求

SYNOPSIS

In the Edo period, there are a lot of god *inari* worshipped as a folk belief in *Nihonbashi*, it was prospered as a castle town's commercial area. Further more, in the present city of Tokyo, these *inari* are still remain their figures in a space between building and building or on the roof top. And also, they have been playing an important role for the people as residential activities in the city.

The purpose of this paper is to clarify urban area's shrine architecture is what ought be archived in the future. I focus on their space features and their management. Classified and all shrines into five models and analyzed As a result, it is clear that some effective ways. 1) It is necessary to locate good position that visitors can recognize their existence. 2) Using surrounded streets when they perform a festival. 3) Considering the relationship of shrine and new district. Thus, this paper was suggested that the people who live in the city ought to be how to relate shrines in urban area in future.

1.　序論

1.1　研究背景と目的

江戸時代、町人地として盛えた日本橋には、民間信仰の稲荷神社が至る所に点在しており、都市化が進んだ現代においても、それら稲荷神社は、ビル郡の隙間や屋上といった独特な都市環境の中に存在している。また、祭礼時においては、町が団結する核となり、地域の都市活動や地域基盤として重要な役割を果たしている。

一方で、近年の都心回帰の流れにより、日本橋地域は新規住民の人口が増加している。これまで、地元のコミュニティ（氏子・町会）や年配層の信仰（崇敬者）によって支えられてきた都心の神社の在り方は、どのような形で次の世代へ繋げるべきか、文化・伝統をふまえ、都心の神社と人との関わりを見直すあらたな局面に来たと言える。

そこで本研究の目的は、次世代につながる都心型神社の在り方を探るにあたり、まずは人が都心に神社が存在することを知るのが第一歩であるのを前提に、都心回帰の進む日本橋地域において、1.神社の分布を把握する。都心の神社建築を分析するにあたり、2.空間特徴を体系的なモデルで類型化する。運営管理をしている団体が神社空間をどのように利用しているか3.実態調査し考察する。以上の道筋に沿って、将来、神社とまち、神社と人がどのような関係を持てるか、4.今後の課題と可能性を明らかにする。

1.2　研究の構成と方法

本論文は以下の５章からなる。

［第１章］では、社会背景を基に本研究の意義を示すと共に、既往研究をふまえ、本研究の目的と位置づけ、本論の構成、研究方法について述べる。

［第２章］では、現地調査で明らかになった神社数と分布を地図で把握し、都市と神社の関係を読む。また、江戸・明治・大正・昭和の都市の歴史変遷をふまえ、神社の鎮座地や周辺環境の変化について基礎的研究を行う。

［第３章］では、都心型神社の空間特徴を類型化するにあたり、ⅰ利用形態、ⅱ道路接地率、ⅲアクセス性、ⅳ境内の面積規模、以上４つの評価項目を設け、ダイアグラムで神社空間を典型的な５つのタイプに分類する。分類表を基に、日本橋地域の特徴的な神社空間、管理・運営方法について考察し研究対象の神社を選定する。

［第４章］では、研究対象として屋内型（初音森神社）、境内型（椙森神社）、公開地型（浜町神社）を位置づけて調査、分析を行ないそれぞれの課題整理を行う。

［第５章］４章までの成果を踏まえて、都心の神社の空間特性と利用のされ方をまとめ、次世代の神社の在り方について課題とその可能性を示す。

1.3　研究対象地について

本研究の対象地は、東京都中央区日本橋地域（約3.5k㎡）に定める。1932年以前、日本橋地域は旧東京市の区として95の町で構成される自治体であったが、昭和22年に都の整理・統合計画が進められ中央区日本橋となり、結果、現在の町の数は22に編成され構成されている。次に、日本橋の神社に関する文献資料について、神社数と分布を確認し数を統合するとその数は58社あった。しかし、本研究の調査で、実際に日本橋全域を調査し存在を確認を行なった過程で、新たにプロットされていない神社10社があり、それらを追加すると、2007年現在で64社あることがわかった。太い○は新たに追記した神社。（図1.3）

図 1.3：日本橋地区神社分布図

２．　日本橋地区の神社と都市構造の変遷

2.1　神社数と信仰

稲荷信仰が集積する日本橋　神社庁のまとめた 23 区ごとの神社数[1]を参考に、単位面積あたりの神社分布密度を算出すると、中央区(30 社)は 2.95[社／㎡]と第 3 位と上位にあった。さらに、2007 現在の調査で、日本橋地区だけで、10 社を新たにプロットした 64 社であることを考慮すると、さらに上位にランクインすると予想される。
また、信仰別割合[2]を比較すると、日本橋は稲荷信仰が 70%を占める。23 区の中でも稲荷信仰が多い地区である特性が明らかになった。それらの維持管理を行なう主な人・団体は、宮司、氏子、町会の人、崇敬者である。建造物の修復や境内のメンテナンスは、専門の業者が行なっている。

2.2　都市形成と神社の関係

表 2.2：神社創建時期

徳川氏移封以前		15(13)
江戸時代初期		12(9)
江戸時代・後期		18(11)
明治		6 (3)
大正		1 (0)
昭和	戦前	3 (2)
	戦後	0 (0)
不詳		9 (3)
合計		64(41)

□江戸時代初期　徳川氏関東移封後（1590～1687 年）とした。
□江戸時代中・後期　元禄以降（1688～1867 年）とした。
□（　）：第一住宅建設協会の調査数

江戸期　徳川入城以前、日本橋地域は巨大な村落が集積した平野で、当時、里はずれの森に農耕の神として祀られたイナリがあり、それらは社各が郷社となる神社の原型である。江戸期に入り、町人地として栄えた日本橋は、現世利益・商売繁盛の精神のもと、民衆に稲荷信仰が爆発的に広まった。また、参勤交代により大名屋敷が建設され、藩主に縁のある神社の分霊が祠に入れて屋敷神として稲荷が祀られるようになる。（表 2.2）

明治・大正期　明治維新が起こると廃藩置県が行なわれ、大名屋敷が没収され転用される。残された神社は周辺の住人が預かり、町の守り神として神社を祀るケースが現れる。大正 12 年の関東大震災では、火災で木造建築は壊滅状態となった。その後の復興事業で、1930 年代に再建される神社において、神社の不燃化を目的に SRC 造の近代和風様式の神社建築が現れ始める。

昭和期　昭和 20 年の東京大空襲において多大な被害を受ける。戦災地図（図 2.2）において、中央部分は被災を免れた地域である。戦火を免れた昭和 6 年建立の SRC 造の㉜椙森神社、区の文化財となった木造建築の㊱小網神社が現在までに残ったことは、日本橋の神社が建築史の上でも貴重な存在であることが分かる。戦災復興では西堀留川の埋立、高度経済成長期には日本橋川上空の高速道路の建設。中高層のオフィスビルが建設され都市化が進む中、小さな稲荷は主要な神社に合祀されていった。

図 2.2：戦災地図

2.3　小結：日本橋地区の神社の特徴

以上の都市変遷の背景から、日本橋の神社は地元の熱心な信仰によって支えられ、建築形態を変化させながらもその歴史を脈々と受け継いで今日に至ることが明らかになった。現在、64 社中、グランドレベルに鎮座する神社は 76%, 屋上は 17%である。また、神社の発生の仕方に注目すると、日本橋神社の特徴をまとめると、1. 徳川氏入国以前から、村の鎮守として祀られていた稲荷が古い神社が都心に残っている。2. 大名屋敷跡地に残った神社を町の守護神として祀る神社がある。3. 企業ビルの屋上に鎮座する神社は、その会社業務と関係する神様を祀るケースが多い。

３．都心の神社の空間特徴の分析

3.1 現在の都心の神社空間の特徴

都心型の神社空間を体系的に分類するために、４つの評価項目を設け分析を行った。

ⅰ利用形態（公共⇔私的軸）

利用者により評価を行なう。公共的な利用とは、(f)何気なく通る人も含め、利用可能な神社である。つまり、一般公開され参拝者も多い神社と言える。逆に、利用者が、 (a)氏子や(b)崇敬者に限られる場合は、案内板がなく私的に利用される。個人住宅や会社の屋上に鎮座させ利用する場合が多い。（図 3.1-1）

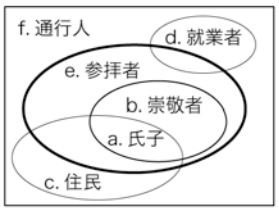


図 3.1-1：利用者の位置づけ

ⅱ道路接地率（表3.1-1）

神社と隣接する建物の接触度合いを示すために用いる指標。敷地境界線が道路・歩道・公開空地に接する面を敷地の外周の長さで割る。つまり道路接地率yは[0<y≦1]（＝道路接地面/境内の外周の長さ）の式で算出した。値は0に近いほど、間口の幅が狭い奥まった場所にある神社で、逆に1は神社単体として存在している状態である。（図3.1-2）

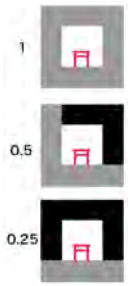


図 3.1-2

ⅲアクセス性

アクセスは参道の長さに意味合いが近い。都心の神社においては、入口から社殿までの距離をさす。たとえば、屋上にある神社は、敷地の入口からの距離は長くなるのでアクセスが困難な状態となる。（図3.1-3）

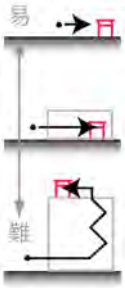


図 3.1-3

ⅳ境内面積（表3.1-2）

境内面積(敷地面積−施設建物で算出)は、規模の大きい順に、㊹水天宮1168㎡、⑦日枝神社596㎡、㉜椙森神社410㎡、㊷銀杏八幡神社であった。大名屋敷の跡地を利用した神社㊹,㊷や官弊社⑦であるのに対して、㉜は郷社で一番広い境内規模になる。また、神社境内の面積の平均値は91.3㎡(約27.6坪)であるが、日本橋の神社の85%は平均値を下回る境内の狭い神社である。

表 3.1-1：道路接地率

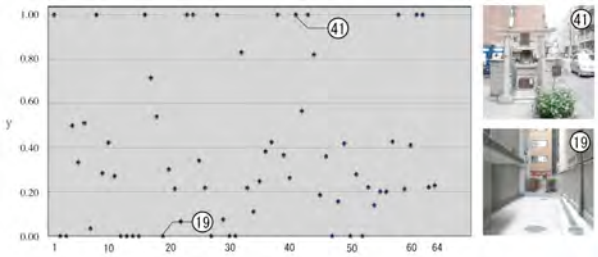
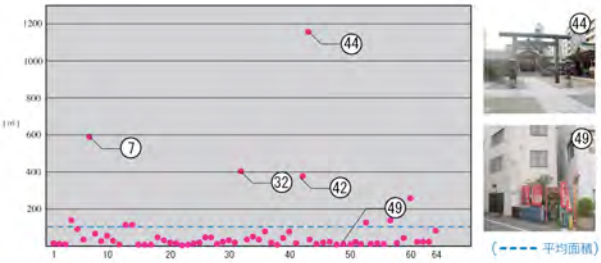


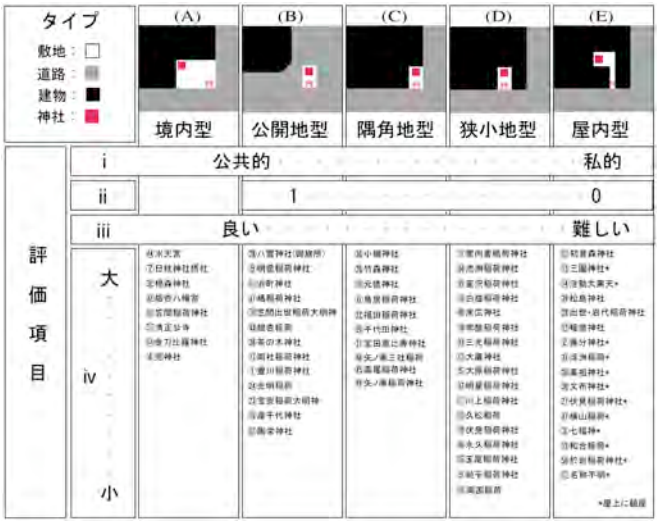
表 3.1-2：面積規模



3.2　都心の神社空間パターン

3.1で行った評価項目を軸に統合し、都心型神社の空間を５つのパターンを導き出し、(A)境内型、(B)公開地型、(C)隅角型、(D)狭小地型、(E)屋内型 と名付け分類を行なった。下図は神社名を載せた一覧である。（**表3.2**）

表 3.2：都心の神社空間パターン



3.3　特徴ある都心型神社の考察

分類した空間パターンをもとに、現在の都市における日本橋地域の神社空間の特性を示すことを目的に、パターンごとに12社の事例を紹介し考察しまとめた。（**本論参考**）

４．都心の神社の実態調査

分類した５つのタイプの内、屋内型、境内型、公開地型の神社を対象に**１）空間の特徴、２）利用実態、３）周辺との関係**　について実態把握し考察を行なった。（**表４**）

表 4 調査対象の神社の概要

	屋内型	境内地型	公開地型
社名	初音森神社	椙森神社	浜町神社
創建	１３００年頃（元弘年中）	９４０年頃（天慶年中）	１８８９年（明治２２）
竣工年	昭和４９年 １９７４年	昭和６年 １９３０年	平成１７年 ２００５年
築年数	３３年	７７年	２年
構造	SRC造	ＳＲＣ造	木造
階数	地上１２階 地下１階	地上２階	地上１階
境内地	８３.３㎡ ２５.５坪	３７６.７㎡ １１３.９坪	１１０.６㎡ ３３.１坪
建築面積	２０６.１㎡ ６２.４坪	１９４.１㎡ ５８.８坪	１１４.３㎡ ３４.７坪
外観			

4.1　屋内型の神社（初音森神社）

初音森神社は、日本橋問屋街が連なる馬喰町・横山町・東日本橋の鎮守として祀られる神社である。創建は 1300 年頃（元弘年間）、初音の里に鎮座していた稲荷が原型である。江戸期における墨田区千歳遷移や東京大空襲による被災を受けながらも復興を繰り返し、現在に至っている。同社は、昭和 49 年の等価交換方式によって、近代建築ビルの中に神社機能を挿入した(E)屋内型の神社となった。屋内にありながらも、町の熱心信仰が続く条件を聞き取り調査・利用実態・図面から分析し、課題の整理を行なった。

１）参拝者に配慮したデザイン

12 階立てのビルは、２階が神社施設として活用される。１階は神社が所有する駐車場（4〜5 台）で、４階は宮司の住居である。５〜12 階はオフィス・テナントが入るため、動線エリアは分かれている。２階の儀式殿へ上る階段は、参道の役割を果たしており、石のタイルが壁面に貼られた装飾になっている。常に屋内が一般開放されているわけではないため、２階の入口には別に拝殿が一つあり、さらに参拝者が階段を登らなくても参拝ができるようにと町会の協力で、平成 18 年に１階の鳥居の側に新たに祠が設けられた。（**図 4.1-2**）

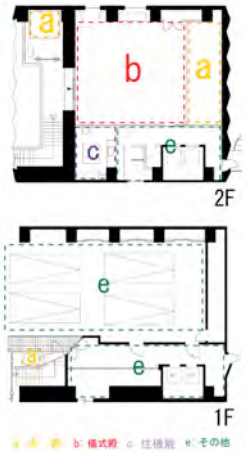


図 4.1-1：空間配置

２）まちとの接点　主な年間行事はコンスタントに行なわれている。たとえば、毎年４月には地元町会の人々が集まり、初午祭の祭儀が行なわれる。また、(b)拝殿は、町の会議所として活用することが可能である。2005 年には、建築学科の大学生が地元の人にまちをよくする提案を発表するデザインワークショップ[3]の会場になった。地元のまちづくり活動に利用するのであればスペースの貸出し可能であることが明らかになった。

図 4.1-2

３）G.L.の活用　聞き取り調査で１階のエントランスホールに、町の歴史が分かる小さなギャラリーを設置し、保存庫を町会神輿のショーケースに改築できないか検討中であることがわかった。実現すれば、道行く人がまちの歴史を知るきっかけができる。そのほか、地元のまちづくり委員の取組みで、神社の前の通りを「初音森通り」と名づけ、人を歩かせる社会実験[4]が行なわれたことは、まちの人が神社に思い入れがある取組みの現れだと考えられる。

4.2　境内型の神社（椙森神社）

椙森神社は、1000 年以上鎮座する歴史の長い（A）境内型の神社である。昭和６年に SRC 造で建てられた最も初期の神社建築である。また、都心に立地しながらも一定規模の境内面積を保つ神社である。

１）境内の配置変遷の分析　(a)社殿, (b)儀式殿, (c)神輿庫, (d)神楽殿, (e)その他に分けて配置変遷を分析すると、1850 年から 1900 年頃の図では、参道正面の鳥居を入口としたが、昭和６年社殿を不燃化建築となった際に、西側の鳥居を表門とした。また、境内にある末社がなくなって、相殿の中に入った。神楽殿は東から西へ配置が変わってい

るが、境内の基本的な機能は一貫して変わることなく残っている。また、江戸の文化を伝えるため「富塚」の記念碑が建立されていることから地元の崇敬者の熱心さが伺える。

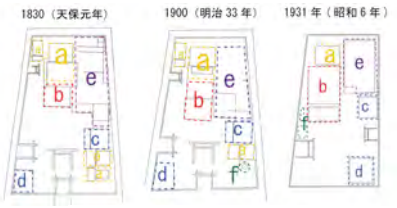


図 4.2-1：境内の配置変遷

２）境内の利用方法

神楽殿　べったら市では能楽の演舞が行なわれる。また、節分祭は夜、社殿側と神楽殿の両側から氏子が豆をまく。

神輿庫　自前の神輿庫に町神輿に保存する神社は、日本橋地域においても数少ない。参拝者に一般公開されている。

図 4.2-2：神楽殿の能楽

提灯　祭事では、氏子の奉納により寄与された提灯が、境内を取り囲むように飾られる。ハレを演出する要素として重要な役割を果たしている。

３）べったら市における周辺との関係　毎年 10/19,20 は、宝田恵比寿神社と共に､恵比寿溝べったら市が行なわれる。周辺 300m 四方の道路の車両通行が閉鎖され、200 軒以上の屋台が並ぶ。普段はオフィス街として人通りが少ない街が江戸の情緒ある賑わいと活気ある空間に変化する。

4.3　公開地型の神社（浜町神社）

日本橋は居住人口が増加しており、近年マンション開発も行なわれている。都市型神社も少なからず影響を受けており、対処方法として、1 つは別の神社に合祀させて遷移させる。２つ目は、新しく公開地型の神社はとして事業者側の負担で神社を更新する方法があり、㊶橘稲荷神社（3.3）が古い事例である。その際、神社空間は狭小地から周辺環境が公開地へと変化する。比較対象として㊶の成り立ちを聞き取り･分析を行なった後、最近の新しく更新された(E)公開地型の浜町神社について、アンケート調査を行ない公開地型の神社の現状分析・評価を行なう。

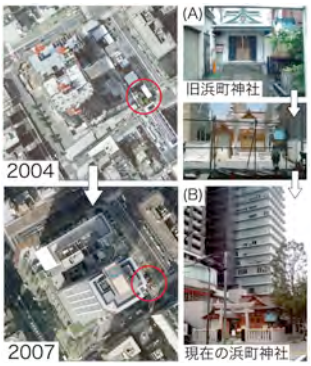


図 4.3-1：再開発と浜町神社

１）地元住民の合意による更新　浜町神社は、大名屋敷後に残った稲荷大神を浜町の住民が祀ったのが始まりである。昭和 68 年に区画整理事業計画のもと､浜町３丁目住民が組合を結成し、約 1.8ha の密集市街地を再開発事業が行なわれた｡平成 17 年に高層型マンションと大型複合施設が完成した。これまで、狭小地に佇んでいた神社が人通りの多い新しくできた公開空地に鎮座し再開発の新しいシンボルになった。（図 4.3-1）

２）通行人の認知について　新旧の浜町神社(A)と(B)の写真を比較し､抱く感情･イメージについて、どちらが 1.「神社らしいか」,2「好感的か」3「威厳があるか」,4「伝統的か」,5「願いがかないそうか」と質問した結果、質問項目 2 において、現在の浜町神社(B)の方がにおいて「好感的である」と感じる割合が７割を占めた。

神社は、周りにオフィス街・商業施設がある環境に立地するため、多くの人が浜町神社について認知している。通行人で社名を知っている人は、半数を超えていおり、世代は 40 代以上が超えている。さらに日常生活において「参拝することもある」と答えた人は 20％であった。一方で、若い勤務者にとっては、神社を認知してはいるが社名まで知っている人はいない現状があった。

３）公開空地と神社

アンケート結果において、80％以上の人が狭小地型の神社よりも、周りが開けた神社の方が参拝しやすいという集計が取れた。認知の観点から見ても、大型複合施設の足元に鎮座する浜町神社は今後、次世代につなぐうえで、新しい都心型神社の事例の一つと言える。公開空地では、定期的に新住民の参加するさまざまなイベントがあり、祭事に直接関係ないにしても､神社と新住民との接点がある。また、伝統的な神田祭においても、御仮屋が建てられ、新住民と既存住民が集まる光景が見られる。

図 4.3-2：新住民の神社利用

５．　結論・展望

本研究による結論は以下の通りである。

１. ビルの屋内や屋上に神社機能が挿入されることになった場合、崇敬者は減少し、維持管理が困難になる可能性が高くなる。屋内型神社の更新の第一歩は、参拝以外の目的で建物に訪れる人でも、神社にアクセスしやすく、また存在認知ができる配置やデザインの工夫が必要である。(4-1)

２. 都心の神社の面積規模は平均して小さいため､神社の認知度が相対的に低い傾向にある。今後、神社が更新され信仰が継続される上で、多様な他者にも存在を知ってもらうことが重要な鍵となる。認知度を上げる解決策として、祭事に周辺道路を活用し、境内を飾り付けて空間を劇的に変化させる方法は有効的手段である。(4-2)

３. 都市環境において､神社が鎮座している一街区の開発が行われる際に、神社を他へ遷座するか、関係を避けて開発が行なわれがちである。後世に受け継ぐためにも、残す価値が高い神社建築であれば、可能な限り保存し、そうでない神社においても奇麗に更新し新調すべきである。資金面においての問題は、崇敬者側の働きかけと開発側の理解と協力が必要だと考えられる。また、その際、通り沿いに神社を配置し認知できるよう工夫が必要である。(4-3)

【注釈】[1]昭和 61 年に神社庁の調査,[2]神社分類は岡田荘司の分類方法を参考,[3]下町けんちく倶楽部デザインワークショップ／平成 19 年 11 月,[4]日本橋みゆき通り道路実験協議会／平成 19 年 11 月ー平成 20 年 1 月実施,[5] 東京都都市整備局 HP

【参考文献】[1]『東京都心神社名鑑（下巻）』／東京都神社庁／昭和 63 年出版, [2]『日本橋・京橋区（現東京都中央区）に所在する全神社の由来に関する実施調査』／財団法人第一住宅建設協会／昭和 62 年出版,[3]『初音森神社由緒書』／初音森神社／平成 15 年,[4]『あの日の日本橋』／佐藤洋一／2007 年出版